



● 社会との多様な連携を求めて  
**交流・協働の中で、  
 大学の存在感を  
 高める** 学びと体験が、  
 学生の経験価値を向上させる

小林 浩 ●リクルート進学総研所長 / 『カレッジマネジメント』編集長  
 芝井 敬司 ●学長

教育・研究活動を通じた地域社会や産業界、高校などとの社会連携や大学間の相互連携が、大学の使命として重要性を増している。また、変化する時代に対応する人材の育成を目指す教育改革が急速に進行し、大学の役割が問われている。進学事情など、豊富な調査、事例をもとに発信するリクルート進学総研の所長であり、大学の経営層に向けた高等教育の専門情報誌『カレッジマネジメント』の編集長を務め、大学教育を巡る動向に詳しい小林浩氏を迎え、芝井敬司学長とこれからの大学のあり方、学生の学びの形について意見を交わした。

◆ 関西大学のイメージは、活気、楽しく切磋琢磨

芝井 「カレッジマネジメント」はいつも楽しみに読ませていただいています。本学については、どのような印象をお持ちですか？  
 小林 私どもでは「進学ブランド力調査」を2008年から毎年実施しておりまして、そこで調査開始以来、関西エリアの「志願したい大学」の第1位を維持しているのが関西大学です。活気があり、楽しそう、そういうワクワク感を持つ高校生が多いようです。私自身の関西大学に対する印象は、多様な学生が切磋琢磨しながら、学びとキャンパスライフを謳歌し、社会へと巣立っていく大学ではないかと思っています。

芝井 そのイメージはかなり実態に近いのではないのでしょうか。いろいろなことに関心を持ち、それを在学中に仲間との交流の中で伸ばしたい、自己の成長に対して貪欲な姿勢を持っている学生が多いように思います。学生のこの元気の良さがなくなったら、本学の将来はとても寂しいものになるといつも思っています。

小林 学生数は現在、どれぐらいでしょうか？  
 芝井 大学院生も含め3万人を超えています。近畿圏の出身者が多いとはいえ、全国から学生が集まっているので、言葉や文化など新たな驚きがたくさんあるようです。

小林 その中で刺激し合えるのは、大きな強みですね。  
 芝井 自分の趣味に合うクラブなどの団体がなくても、同好の士を求めて声をあげると、「面白そうだからやってみよう」と集まってきてサークル活動ができる規模です。学部での学びだけでなく、自分自身の視野を広げる機会が得られる環境は非常に大切です。

小林 そういところが、高校生から見るときに、活気があるイメージにつながっているかもしれませんね。

◆ 授業だけでなく、総合的に経験価値を高める

芝井 加えて、最近顕著になってきたのが、ピア・サポートと呼ばれる学生による学生の支援活動やボランティア活動です。授業のサポート、勉強や人間関係など学生生活の相談、留学生の生活・学習支援から地域の清掃などのボランティア活動まで、誰かを支援することに学生はとても積極的です。これは最近の若者の特長でもあると思います。オープンキャンパスでも、学生が主体的に企画を立案し、実際にキャンパスを案内することで、受験生がどのように自分たちを見ているのか把握しています。またその結果を次に生かそうと努力しながら活動をしているので、とても頼もしい存在です。正課の授業とクラブ・サークルなどの課外活

動、この2つの中間の領域が膨らんできているという印象です。  
 小林 保護者の方や高校の先生の調査回答からは、社会人基礎力のうち、規律性や状況把握力には長けている高校生は多いものの、これから求められるのは主体性だと感じていることが分かりました。

また、最近では2020年の入試改革ばかりが目立ちますが、実は、高校と大学、それをつなぐ入学者選抜を一体的に変える高大接続改革の一部でしかありません。勉強の面では優秀な学生が、それらの知識を社会でうまく活用できなかったり、意思決定や判断ができない指示待ちの若者が多いという指摘もあり、主体性、解決に向けて探求する思考力、他人と協働して学ぶ態度などを育成する教育へと、大きく変わる改革が進められています。

芝井 そうですね。知識や技術を教え込むというインプットの効率ではなく、主体的な学びから生み出されるアウトカム(学習成果)が、教育に問われている時代ではないかと思えます。

小林 私どもは、そのアウトカムを「経験価値」という言葉でお伝えしています。その経験価値を正課だけでなく、正課外や先ほどおっしゃった中間領域の活動と合わせながら、大学4年間でどのように積み上げていくかが、多分これから重要になっていくと思います。今のお話をうかがうと、関西大学はそういう経験価値を高める優れた仕組みを、すでに内包しているという感じがしました。

芝井 経験価値を高めるということでは、本学では「学校インターンシップ」に早くから取り組みました。これは、幼稚園から高校まで、学生が学校現場で就業体験するもので、教職課程志望者に限らず参加が可能です。学校の先生の仕事は授業だけではなく、学生らは自分よりも年少の子供や先生方に関わることで、自分達がかつて通っていた学校を別の目で見ながら、「大人」としての自覚と責任感を身につけます。15年目を迎えるこの取り組みでは、毎年150人近くの学生を学校現場に送り出しています。

小林 それらの経験を自分の言葉でしっかりとストーリーにすることができれば、若い時の経験は人生を豊かにすると思います。

米国の研究者が語った「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」という予測からも見受けられるように、今後グローバル化、ICT化や産業構造の変化により、仕事の中身や求められる人材は大きく変化するでしょう。日本の高度経済成長期の頃は人口も増え、国家全体が成長していました。その時代と現在は置かれている状況が異なりますが、知識を細かく詰め込んで再生するだけではなく、変えていく力が求められることは間違いありません。

芝井 時代の変化に対応できる姿勢が形成されていないと、時代の変化に流されてしまい、本人の幸せにつながりません。未来を見通す目も必要ですが、自分自身が変化に対応するのだという心の姿勢を学生には持ってほしいと思っています。

◆ 多面的な連携で、地域の中での存在感を高める

芝井 本学では2008年に学部を越えた形で、研究推進部、教育推進部、国際部とともに、社会連携部を設置しました。そして高大連携も産学官連携も、自治体などとの地域連携も、ここに集約し、学外から依頼や要望をワンストップで受けられるシステムを作りました。組織として多方面の連携事業を担っているのは珍し

■対談

# Active Learning



経験価値を正課だけでなく、正課外や中間領域の活動と合わせながら、大学4年間でどのように積み上げていくかが、多分これから重要になっていくと思います。

**小林 浩 (こばやし ひろし)**  
1964年埼玉生まれ。リクルート進学総研所長。リクルート「カレッジマネジメント」編集長。88年早稲田大学法学部卒業。大学卒業後、株式会社リクルート入社。グループ統括担当や、「クイコとマナブ」商品企画マネジャー、大学ソリューション営業、社団法人経済同友会出向(教育問題担当)、会長秘書、大学ソリューション推進室長などを経て、2007年4月より現職。文部科学省中央教育審議会高大接続特別部会臨時委員。

く、総合大学である強みを生かし、文理融合の取り組みも多く行われています。学校インターンシップも、現在は社会連携部の中の高大連携センターが所轄し、協定を結んでいる23の自治体の教育委員会と連携して実施しています。

大学が研究と教育の機関であることは、いつの時代も変わりませんが、知恵や知識は大学の中にあるだけでなく、社会全体にあるものです。だから大学が社会とどのようにつながるかを考えることから始めないといけない。その観点から社会連携部を基点にさまざまな形で活動をしようと思っただけのもの。

**小林** 昨年は創立130周年を迎えられたということもあり、大きな事業もありましたね。

**芝井** 本学から生まれた科学技術、企業の開発力や事業力、さらには文科系分野の発想を融合し、イノベーションを生み出すことを目的に、昨年イノベーション創生センターをキャンパス内に開設しました。現在50社以上が関係し、教員・学生と共同研究する企業・研究機関が対話・交流しながら研究を進めています。今は産学官連携研究が多いですが、今後は学生、研究者による起業やベンチャー支援に発展することが期待されています。

また、大阪都心部に設置した梅田キャンパスは、起業のスタートアップ支援を実施しているほか、学び続ける方々の交流の場を設け、学外の方に開放しています。

地域連携の面では、まずキャンパスがある各自治体と連携協定を結び、関係を深めてきました。例えば、吹田市とは地域防災計画への学術的協力、有事の際の本学施設の提供など多岐にわたる連携協力を行います。社会安全学部のある高槻市とも、「安全・安心のまちづくりに関する協定」を結んでおり、災害時の緊急避難所に指定されている高槻ミュージアムキャンパスでは、ブルー用水浄化システムを採用し、災害時に飲料水として提供できるようにしています。

**小林** 『関西大学地域連携事例集』を拝見しました。活動内容が多様、かつ大規模で驚きました。

**芝井** 本学の地域連携事例を100件掲載していますが、これでもすべてではありません。限界集落の活性化に対する提案や各種イベントへの協力、防災・安全教育の実施、伝統行事の存続に関する研究など、大学と地域との連携の方法はさまざまです。今後は各大学が、地域とどう多面的に関わっていくかが問われ、その関わりはより緊密なものになっていくでしょう。

**小林** 3万人の学生とそれを支える教職員が地域に出ていけば、すごい力になりますね。

**芝井** 大学には高度な研究活動も必要です。社会に対して有為な人材を送り出すことも大学の使命ですが、社会や地域にとっての大学の存在価値は、どんな形で地域に関わり交流しているか、それによって計られるのではないのでしょうか。10年、20年と経った時に、関大とは深い結びつきがあるから、我われの街にとって本当に大事な存在だと言ってもらえるようにしたいのです。

## ◆国内の大学間の連携をもっと活発に

**小林** 大学間の連携には、単位互換やコンソーシアム、連合大学院などさまざまな形がありますね。

**芝井** 現在、連携協定を結んだ国内の大学が14校になりました。多くは近隣の大学ですが、ライティング支援の共同事業をきっかけに、津田塾大学とも4月に包括連携協定を結んだところです。早稲田大学とは、職員の共同研修などを実施し、教育・研究領域での学術交流・課外活動においても交流事業を行っています。

日本の大学は海外の大学とはよく協定を結びますが、国内の大学との例はあまりありません。留学と聞けば、海外の大学を思い浮かべる方がほとんどではないでしょうか。EUにはエラスムス計画があり、ヨーロッパ全域の多くの大学間で、学生や教員の自由な移動が進んでいるのに、日本の大学は何をしているのかと危機感を覚えます。

本学は高松塚を発掘した大学です。例えば、飛鳥について勉強したいと考える他大学の国文学や考古学専攻の学生や大学院生が、国内留学制度を使って本学で勉強する、一方、本学の学生が他大学のゼミに行きたければ送り出す。そのように学生が自由に先生を求めて動くことができるようになれば、画期的なことではないでしょうか。

## ◆変化の速い時代に、学び続ける力を育てる

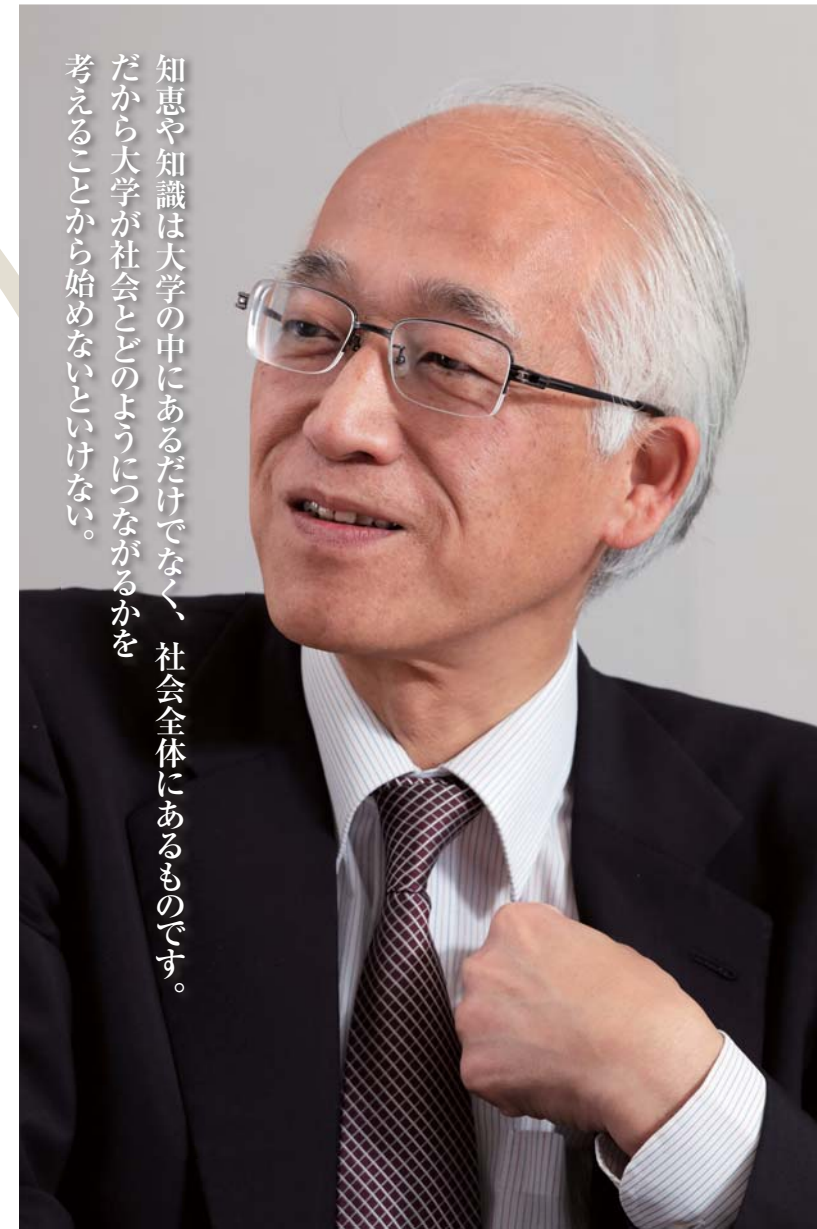
**小林** 関西大学は、関西を変えていくパワーを持った大学であると思います。だから、大阪の関大ではなく、少なくとも関西の関大であってほしい。学生がいきいきとして活気があり、関西を変える原動力となる人材を育成する大学であってほしいと思います。東京から見ると、関大は不思議なパワーを持っている。それを分かりやすい形で示せたら、非常に面白いのではないのでしょうか。

変化の激しい時代の中では、大学で学んだ知識も数年で陳腐化してしまいます。これからの時代は学び続ける力が必要となり、大学では“learn how to learn”、つまり「学び方を学ぶ」ことが求められます。教育の現場では今、アクティブ・ラーニングを取り入れることが盛んですが、アクティブ・ラーニングとは授業をアクティブにすることではなく、将来学び続けるアクティブラーナーを育てることだと言えます。関大の4年間で、学び続ける力を伸ばすことができれば、「関大生は違うぞ」と社会から大きな期待と信頼を集める大学になるのではないかと思います。

**芝井** 知識基盤社会の中でずっと学び続けることを想定した形で、もう一度大学の教育のあり方を考えていかなければならないと思っています。

私たち関西大学は、「学の実化」(=学理と実際の調和)という非常にユニークな理念を、教育理念として大事にしてきました。本学の社会連携の取組がまさにそうで、大学の中でだけ閉じこもって何かするのではなく、なるべく外の世界との接点を広く持つという考えに基づいています。

**小林** 学の実化は本当にいい言葉ですが、高校生には分かりづらくいかもしれません。それをどうわかりやすく伝えるか、私たちは「翻訳」と呼びますが、その理念がどういう風に大学の授業や、あるいはボランティアなどを含めた課外活動や社会連携活動につながっているのか、それこそ、ストーリーとして見えてくると、関大らしさがより一層際立ってくるのではと思います。



知恵や知識は大学の中にあるだけでなく、社会全体にあるものです。だから大学が社会とどのようにつながるかを考えることから始めないといけない。

**芝井 敬司 (しばい けいじ)**  
1956年大阪市生まれ。78年京都大学文学部史学科(西洋史)卒業。81年京都大学大学院文学研究科博士課程後期課程中途退学。84年関西大学に兼任し、専任講師、助教授を経て、94年文学部教授。文学部長、副学長を歴任し、2016年10月に学長に就任。独立行政法人日本学術振興会大学教育再生プログラム委員会専門委員。一般社団法人日本私立大学連盟常務理事。主な共著に「新しい史学概論」「EUと日本学—「あかねさす」国際交流—」など。

# Social Cooperation